

メディアの系譜学におけるデジタルメディアの位相

マクルーハン再評価にむけて

金城学院大学 中田 平

はじめに

吉本隆明は『共同幻想論』において古代日本社会の成立に関する構造分析を果たした。なかでも共同幻想、対幻想というタームは長い射程で日本社会の環境を把握する目安になっていた。紀元前までさかのぼる原始日本社会と、1960年代後半の学生運動の内ゲバ、リンチ殺人事件には、その同じ論理で解明できる同質の精神構造があった。しかし、まさに今ときを刻んでいる現在の日本社会を分析するにはこのタームはもう不十分ではないかというのが私の印象である。なぜなら、かつての日本的な共同幻想を成立させる社会条件がすっかり変化してしまっていると思われるからである。

もっとも重大な変化を予感させたのはオウム事件であろう。オウム真理教の信者たちの狂信性はもはや共同幻想というタームでの分析の及ぶところではないのではないか。オウム真理教の事件は、事件としても異常だが、かつて脱出の共同体と称したキリスト教の過激な運動のような宗教的共同性と修行を通じての解脱という小乗的な側面との複合的な構造をもっている。宗教性と共同性の関係の問題をどのように解明するかは『共同幻想論』のテーマでもあったが、はたしてその分析装置だけでこの事件の解明はできるだろうか。

また、中学校でのいじめ・不登校の蔓延から酒鬼薔薇聖徒事件のような未成年による猟奇的殺人事件も、もはや対幻想というタームではくくりきれない精神の働きを予想させている。世紀末的な時代状況を理解するにはどのような分析視座を用意すべきか。

アイデンティティの喪失

吉本ばななの現象を導入にしよう。ここ10年以上、吉本隆明自身より娘ばななの成功の話題の方が優先している。娘の七光りか、ばななパパとして吉本隆明が若者文化に再登場する機会が多くなった。世代交代として自然の流れでもあろうが、ばななの人気と世界的支持は、その独特の作風と彼女の作品が現代の若者の精神環境を代弁していることがその理由ではないかと思われる。

隆明「たとえば普通だったら恋愛してるとか恋愛関係にあるとか愛人だとか近親だとかって、それぞれ好きの性質がみんな違うわけだ。君の場合には、人物はいつでも交換ができるんだと思う」

ばなな「ああ」

隆明「つまり、男と男の好きでも好きを恋愛に交換することもできるし、それから『キッチン』だったら父親が母親に変わることもできるって。そういう意味で、近親とか友人関係のあいだで登場する人物も、いつでも性も交換できるし、関係も好きの濃さをいつでも交換できるっていう風に作品ができてる。それで近親とか友人とかっていうこともそういう交換できる関係とか、濃くしたり薄くしたりできる関係とかね、そういうのの組み合わせ、って言うともう人工的だけど、まあいずれもそういうものでもってできているっていうのはね、ひとつの特徴じゃないかな」

ばなな「ああ、ためになる。鋭いんだけど、でも鋭すぎる(笑)」

...

隆明「それは君の好みなのか、それとももっと資質に近いものなのかね、あるいは君自身がやっぱり、こういうことがわかったらいいなあっていう風に思ってることの表現なのかね。まあ、そういうことについて何でもいいから言ってくれとね」

ばなな「そんな、乱暴な(笑)。交換可能に関しては、それはもう全く私そのもの。本当に交換が可能。

それがもう下手すると、人間の関係と交換できるものが物とか場所とかに至っちゃうから。それはもう、そういう風に言ってしまうと本当にそう。じぶんで言うとなんかいやらしいけど」

.....

---- だけど、日常生活におけるばななさんの超能力というのはともかくとしても、作家：吉本ばななの中における超能力というのは、やっぱり常に他者との交換というか、常に誰かとのつながりの中で作用するものですね。

ばなな「うん、多分ね、それはね、それはふたつ目のポイントなんですけど、それがない交ぜになって作品が出てくるから読む人はすごく混乱するんだと思うんだけど。ひとつの特徴はその実用性？電話のようにみんなが超能力を使っている空間があるということがまずよく作品に出てきますよね。だからアポリジニーとかが『今日は（獲物が）取れなかったあ』と思うと遠くにいる村の人たちが『今日は肉はない』とかかわっちゃうっていうのと似た実用性。それがひとつと、もうひとつはね、それは前お父さんが書いてたことで私も前々から思ってたんですけど、結局じぶんにとって好意的な場というのは、じぶんが溶け込めるっていうことはやっぱり子宮の中っていうようなことでしょうか？多分」

隆明「うん」⁽¹⁾

徴候的と思われる発言は「交換可能性」と「超能力」である。「交換可能性」というタームは新しい概念を要求している。吉本ばななの小説がアイデンティティを失った若者の世代から大きな支持を得ているのは、次のような電氣的な環境からではないだろうか。マクルーハンによれば、電話は私的なアイデンティティを人間から失わせる。それは肉体を離れた聴覚的空間に人間が離脱してしまうからだ。

マクルーハン：あなたはそこにいる。送り手が送られてくるのです。ついでに言うと、すべての電気メディアの上では送り手は送られるのです。それがメッセージです。あなたはメッセージなのです。電気メディアはあなたを送るのです。電話ではあなたは送られ、あなたが話しかけている人、彼らはあなたに送られるのです。送り手は送られるのです。それに、あなたも言っているとおり、あなたはアイデンティティを失っている、あなたは誰でもないのです。送られている人は誰でもないのです。⁽²⁾

超能力に関しては『共同幻想論』は決して無知ではない。むしろ超能力の鋭い分析が『共同幻想論』の底辺にあると考えて良い。しかし、『共同幻想論』での超能力は狭い村落共同体の共同性を同致することができる能力に恵まれた特定個人に偶然備わったものとしてあった。しかし、現代の若者たちが生きている環境は、その時代の環境と余りにもかけ離れている。次の発言はそうした環境を解くカギを示しているのではないかと思われる。

あなたが電話の上で光速で移動するとき、私的なアイデンティティがないことに注目しましょう。あなたが私的なアイデンティティがないとき、あるいはむしろ肉体がないとき、あなたは自然の法則は関係ないのです。光のスピード下では重力はあなたをコントロールできません。あなたは突然事物の自然の体系からはずされたのです。あなたはスーパーマンです。これはあらゆる種類のことを人間の心理に起こします。完全に人間を変えます。それは完全に隠された地の上で起こることなのです。内容は関係ありません。電話で話す中身に関係ありません。ユーザーのこの変化、完全な変化は言及されませんでした。電話についてのあらゆる文学がそれについて一言も触れていないのです、なぜならそれは隠されているからです。⁽³⁾

光のスピードで移動することによって自然の法則からの離脱が人間をスーパーマン(超人間)にする。アイデンティティの喪失と自然からの脱却はリアリティの欠如へと導く。それではこうした環境のなかで、個人と社会との関係はどうなっていくのだろうか。

(1)『吉本隆明×吉本ばなな』ロッキング・オン 1997年、124-5頁。

(2)「マクルーハン・ライブ」1978年7月17日の録音。

(3)同上。

部族主義的な時代

鉄道列車さえも古い家族のパターンに終止符を打ち、単純な核家族をつくりだす流動性をもたらしました。すべてのおじやいとこやおばは列車に乗って故郷を去ったのです。核家族が残されました。その家族はいまやもう存在しないのです。なぜなら、電気のスピードによって人類の部族的なグループづくりが、小さな核家族から共同の家族にとってかえたのです。だから今日の子供たちはもはや、彼らの小さな、私的な家族に限られていると感じていません。彼らは、いまや、もっと大きな家族の部分であると感じているのです。ナショナリズムはずっと以前に消えました。ナショナリズムは視覚的な認識--彼自身と国と国民の体裁のなかでのプライドです。私たちは部族主義をもっています。一種の宗教主義ですが、全く国家主義的ではありません。そして地域は非常に速く分裂する傾向があります。天国--そこには西洋と東洋では大きな分離主義的感情があります！そして、もちろん、部族社会は国家主義社会よりも形式的ではありません。彼らはすべてのひだ飾りを投げ捨てます。彼らは素朴です。彼らは強い地域コミュニティ感覚をもっているのです。(4)

鉄道という交通手段が、村落共同体を解体し、核家族をつくり出した。第一次産業が発達する過程で生まれたのが核家族状況であった。産業構造が第一次産業から第三次産業に変遷する過程で、マクルーハンの言う電氣的環境に変化する。その過程で核家族さえ解体する。家族・社会・国家・世界というヘーゲル的な拡張が途切れた時代であると言う。部族主義的なグループづくりは宗教的であり、親密／反国家主義という特性を持ち、強い地域共同体感覚をもっていて、国家主義＝ナショナリズム＝視覚的／形式的／国民／プライドとは反対のベクトルにある。ここには国家さえも敵に回してみずからの共同性を優先するオウム真理教の運動を解くカギがないか。次の分析を見てみよう。

公衆が存在する以前は部族的な大衆でした。誰もが誰かの親戚であり、誰もが誰かと深部で関与していたのです。文字とその後の印刷がその無組織の大衆から個人を分離させたのです。[情報の分類があったように人々の類別化があったのです。]このタイプの技術のすべての力が類別化を許したのです。すなわちIDカード、パスポート、個人主義などで、そのような類別化された個人の実在と、自分自身と知識を組織化する私的なパターンを何世紀にもわたって習慣化したあとで、完全な人間の相互依存と相互の関与という無組織の部族的な大衆に押し戻されることはひどく混乱を引き起こすことです。(5)

また、マクルーハンは世界史の流れのなかに、かつて存在した部族的な段階から国民国家への転化の段階を、そしてその次にもう一度部族的な社会へ逆転するという歴史観をもっている。それは別の表現では相互依存と相互関与の地球村（グローバル・ヴィレッジ）になる。

... 今日、電氣的情報メディアの瞬間的世界は突然われわれのすべてを巻き込む。われわれの世界は「突然性」の真新しい世界である。ある意味で、時間は終わり、空間が消失した。今、われわれは原始人のように自給自足で同時多発の「地球村」（グローバル・ヴィレッジ）に住んでいる。自動車でも飛行機でさえ地球村は作れない。地球村は瞬時の電子情報の運動によって作られるのだ。地球村は惑星と同じぐらい広く、また同時に、皆が悪意をもって誰彼なく他人事にさかんに首を突っ込む町内と同じぐらい小さい。地球村はあなたが決して平和を保てない世界である。あなたはほかの皆の仕事に極度の関心をもち、たくさんの他の人々の生活へ関与しているのだ。それはアン・ランダースの新聞コラムの拡大版である。そしてそれは決して調和と平和と静かさを意味せず、ほかの皆の問題に対する莫大な関与を意味する。だから、地球村は惑星と同じぐらい大きく、村の郵便局と同じぐらい小さいのだ。(6)

(4) リンダ・サンドラー『マーシャル・マクルーハンへの非公式なインタビュー』ミス・カテリーヌ、1974年秋。

(5) 「電氣的メディア：マーシャル・マクルーハンによる演説、モンテルー、スイス、テレビの画像」、1973年4月5日、CBCテレビ。

(6) 「マクルーハン、マクルーハン主義を語る」、学校図書新聞13、8号、1967年、39-40ページ。

この global Village という表現は、アメリカ副大統領ゴアの提唱した情報スーパーハイウェイのなかで貫かれている思想の根底にあるものだ。さて、もう一つの問題は暴力とアイデンティティの関係であるが、マクルーハンはこのように述べている。

しかし、実際に境界を越え、新しいアイデンティティを求めるという意味での暴力、つまりまさに知識とアイデンティティへの普遍的な希求という意味で、暴力はわれわれの生き方である。人間のイメージを常に更新する悲劇のヒーローは暴力的人間である。それだから、彼らは自らがリアルであるかどうかを見極めるために殺人を犯さなければならないのだ。これが暴力がやってくる源である。われわれの街で起こる無意味な殺戮は、あらゆるアイデンティティを失った人間、そして自分がリアルであるか、あるいは他の男たちがリアルであるかどうか知るために殺人を犯さなければならない人間の仕業である。⁽⁷⁾

アイデンティティやリアリティの希求が暴力に及ぶという考え方は突拍子もない考えのように思われるかも知れない。しかし、自分が何ものであるか、あるいは自分はこの世に何か存在の証を残すことができるか、という疑問は人間に自然のものである。かつて共同性のなかで許されて存在した人間達が、いまや解体した共同性のなかでみずからの存在理由を失っているとき何をもって自らの生の証をたてればいいのか。マクルーハンはこのように述べている。

フットボールゲーム観戦中の全員が、多くの他の人たちによって同時に共有される経験に深く関わっているという事実によって誰でもない人間になる。この状況下で、世界中の最も有名な人は誰でもない人間になる。これは構造的な事実であるが、万人が万人の経験に関与しているこの「つながれた惑星」との関係において考察すると、これは非在への還元、大衆人間の形成に向かうあらがえない逆戻りである。大衆人間（マス）は教養のない、または愚かな、または思慮がない人間ではなく、瞬時の情報の電氣的状況を体験する一人の誰かであり万人である。電子的人間は抽象ではなく、むしろ同時的文化のなかに実在する個人である。彼の私的な個性が匿名で消されることによって、彼はパラノイアになり、いっそう暴力的になりがちであるが、それは暴力が「私は誰であるか?」、「私の限界は何であるか?」を発見しようと努めるアイデンティティの希求だからである。⁽⁸⁾

「誰でもない誰か」でありながら「万人」になる存在の仕方は、匿名性とパラノイアをあわせ持つ現代の大衆（マス）のあり方だというのは、マクルーハンの分析がかなり直感的であるとはいえ、極めて説得力のあるものである。たしかに、オウム真理教は決して原始宗教集団ではなく、ハイテクを駆使しながら個々人の解脱に向かうという極めて矛盾した概観を呈していた。それは、先にも見た現代社会が部族社会へ逆戻りするというマクルーハンの予想にそったものではなかろうか。

CD-ROM "Understanding McLuhan"

以上のマクルーハンの引用は、CD-ROM "Understanding McLuhan" による。Understanding McLuhan in the electric world, change is the only stable factor. A cd-rom on the ideas and life of media guru Marshall McLuhan. 「電氣的世界におけるマクルーハンの理解、変化こそ唯一の不動因数である。メディアのグル（導師）マーシャル・マクルーハンの思想と生涯に関するCD-ROM」と題されたこのCD-ROMはマクルーハン再評価の重要な起爆剤となる、と断言して過言ではない。と同時に、マクルーハンが様々なメディアで開示していた未整理の断片は、メディアによって社会分析をするために新しい視野を提供するものではないかと思われる。

(7) マーシャル・マクルーハン、(経営情報システム会議のためのスピーチ、サンフランシスコ、カリフォルニア、1971年9月12日)、未刊、3ページ。

(8) 同上。